

第50回日本臨床細胞学会春期大会

胸部間接X線検査と喀痰細胞診の併用による肺癌検診の成績

(財)福島県保健衛生協会¹⁾、公立大学法人福島県立医科大学医学部呼吸器内科学講座²⁾、公立大学法人福島県立医科大学医学部附属病院臨床腫瘍センター³⁾、(財)慈山会医学研究所附属坪井病院⁴⁾

○室井祥江(CT)¹⁾、佐藤丈晴(CT)¹⁾、神尾淳子(CT)¹⁾、柴田眞一(CT)¹⁾、
石田卓(MD)^{2)、3)}、森村豊(MD)^{1)、4)}

【はじめに】肺癌検診における喀痰細胞診は、胸部間接X線検査との併用により行われている。私達は、本検診により発見された原発性肺癌について、発見動機別に調査したので報告する。

【対象と方法】2002年から2008年の7年間に実施した住民検診で、両方の検査を行った受診者は延べ49,722名であり、予後調査により83例(10万対169)の原発性肺癌が見出された。これら83例を喀痰細胞診のみにより発見された群(A群)、胸部間接X線検査のみにより発見された群(B群)、両者により発見された群(C群)の3群に分け、それぞれについて組織型と病期を比較するとともに、過去の検診受診歴を調査した。

【結果】A群は31例で、その内訳は、扁平上皮癌21例(67.7%)、腺癌1例(3.2%)、その他の癌4例、調査不能が5例であった。病期I期/II期/III期/IV期/不明は、それぞれ16(51.6%) / 3 / 4 / 0 / 8例であった。それらの検診受診歴は、癌発見年から過去2年間連続受診のある15例のうち、9例(60.0%)の病期はI期であった。B群は29例で、扁平上皮癌5例(17.2%)、腺癌10例(34.5%)、その他の癌4例、調査不能が10例であった。病期I期/III期以上/不明は、12(41.4%) / 7 / 10例であった。C群は23例で、扁平上皮癌13例(56.5%)、腺癌5例(21.7%)、その他の癌3例、調査不能が2例であった。病期I期/II期/III期以上/不明は、4(30.8%) / 1 / 12 / 6

例であった。

【まとめ】83例のうち54例(65.1%)が喀痰細胞診から発見された。A群では病期Ⅰ期の占める割合が高く、経年受診をしていることが早期発見に繋がったと考えられる。肺癌検診においては、喀痰細胞診を継続して行うことが重要であると示唆された。